

フレーベルを想ふ

—宗教々育に關し更めて—

齋藤善太郎

—

宗教々育に就いての相談を受けて、フレーベルを読んで下さい。フレーベルの「人の教育」を、あの古典をさへしつかりて読んで下さるなら、問題はそれで解決します。ご言つた責任もあつて、本棚の奥から、かれこれ十年餘りまへに買つておいた原田ハウ譯の本を探りだして見たのですが、所々拾ひ読みしてゐるあいだに、はつき驚かされたのであります。他人に古典として獎めた其の本は、まさしく古典、活ける古典として、すまなくもまみれさせてあつた埃のなから、新たなるものとして私のうへに光つてくれたのでした。スツカリつかれて、幸にこれも本棚の奥に藏ひこんであつたレクラム版の原書を探り出してみると、實に魅せられてしまつたのでした。一般に、殊に魂をもつた古典といふものは、翻譯の極めて困難な、いなほこんで不可能なものであることは知りながらも、此のフレーベルの原文は、翻譯文とは餘りにも異ふ活ける精神をもつのに、むしろ喜ばしい驚きを感じさせられ、そこから廻つて來るフレーベルの呼びかけのまへに、敬虔に頬垂れさせられたのでした。そして、決して譯文を責めるのではない、それどころか、原田ハウ譯にしても、田制譯にしても、小原譯にしても、するぶん苦勞して何んとかして此の古典を傳へたいといふ念願に満されながらなされたことだらうご感謝さるゝこながら、しかし、同じ念願は、私をして譯文ご原文とはするぶん異ふ、ご言はしめすにお

きませんでした。たゞ幼稚園において實際保育にあたつてをられる人達のみではなく、すべて教育者に、いひかへて「人に、みんな」、父に母に、兄に姉に、隣人に對しての長者たる人に、ほんとうに此の古典を讀んでもらひたい、と實に念願さるゝのでした。

二

しかし、それはそれとして、では、どんな風に異ふであらうか、と申しますと、開卷第一略々こんな風に讀まれるのであります。そのまへに、これも御知らせしておかねばなりませんが、原書では、その扉の獻辭のところに大文字で「彼にIhm」と敬虔なる含蓄をゆたかに示した文字がたゞ一つ誌されてゐるのであります。「いき高き者」、たゞ其の御心を畏みつゝ、生き、語り、考へ、書きしてゐた原著者をさながらに想はしめる獻辭であります。その獻辭について、

『あらゆるものゝうちに一の永遠なる法則が宿り働きそして支配してゐる。それは、内なるものすなはち精神におけるゞゝく外なるものすなはち自然において、しかしてまた此の兩者を一にするものすなはち生において、つねに同じやうに明瞭に同じやうに確然とあらはになつてゐることであつて、心情よりにせよ信仰よりにせよ、ものは斯くて在らんよりほか如何とも在り得ずといふ必然性に、こゝろ満され貫かれまた活かされてゐる人、もしくは、明透安靜なる心眼もて、外的なるものゝ中に於てまた其れを通して内的なるものを直觀し、内的なるものゝ本質よりして外的なるものゝ必然にまた確實に現れいづるのを見る人、かゝるひとには、そのことは既にあらはに現れてゐたのでありそして今も現れてゐる』。

略々このやうに讀まるゝ數行がまづくるのであります。考へてゐるこいふやうなものでなく、活けるものとして確かに持つてゐるもので、なんとかして語り傳へようとしてゐる原文そのものであるだけ、かうして大略を、原文につきながら

ではあるが言ひかへてみると、實に、もぎ下された花もし、手足といふやうな感じで、自分ながら心苦しくなるのであります。さもあれ原文は其の第一行からして敬虔に我等をうつのであります。「あらゆるものゝうちに……」静かに安らひ、働き、しかも滿ちわたりながら支配してゐるもの、永遠なる法^のがある。かく語らるゝとき我々は、彼に連れられながら、彼と共に、其の「法」のまへにつゝましくまづ立たしめられるのであります。そこへ彼の次の言葉が來るのであります。「そのことは既にあらはに現れてゐたのであり、そして今も現れてゐる……」さきの言ひかへでは後になつてゐますが、原文では此の所が、まへの所に直ぐつゞくのであります。しかも、そのときの其の「現れて」といふ言葉は、彼が果して然ういふつもりであつたか否かは今かるべくは云へないにしても、ここにかく、聯想として、言葉において話しかける、言葉として己を顯はにするといふ、たゞへば新約聖書の第四福音書、ヨハニ傳の冒頭のあたりを、すなはちあの有名なる、はじめに言葉があつた、其れは本來光、神そのものであつた、其れが言葉として、活ける言葉イエスとして、おのれを顯はにしたのである云々、といふあたりを、創生記的莊嚴さをもつて私達に聯想せしめるのであります。そして、そこに在る、その本來在るそのものが、精神となり自然となり、生ずなはち人を成つてゐる、其れらをして現れてゐる、といふやうに語るのであります。そのとき我々の關心をうつのは、「兩者を一にするものすなはち生において」といふ言ひ方の彼の言葉づかひ、すなはち、自然及精神を、おのれに於てまたおのれを通じて「ならしむるもの」としての「生」もしくは人を現しながらしむるもの、したがつて、本來可能態において在るこの本質を現實態において自己實現せしむる當の契機として、人を若しくは生を觀てゐるのであります。そしてかゝるものとしての「人」を、すなはち人の人たる所以のものを、

敬虔なる世界觀を背景にしながら彼は語つてくれるのです。(附記参照)かくして彼は、その語りはじめの數行によつて直ちに我々を眞理の世界に連れていくつてくれるのです。しかも此の眞理の世界は、我々にミツテ、單なる思想ミカ、或る一古人の見解ミカいふやうな、たゞ其れだけにすぎないものとして提示せられてゐるミいふやうなものではないのです。此の事は實に注意を要することあります。ミ云ひますのは、たしかに、思想ミとして扱へば、彼のものをも、或る一つの見解ミとして、思想史哲學史の敍述のなかに一定の位置を與へ、そして、しかし思想史哲學史の進展は遙かに其れを後に残してすゝんでゐる、ミいふやうに、みなしうるからであります。(附記二参照)このことにも必要であります。しかしフレーベルの述べたミころが意味あるのは、それをたゞかく「箇の思想ミとしてみなすミいふやうな解しかたからしては、若しくは、少くとも活ける古典ミとしての此の「人の教育」の精神に直接に觸れようミするかぎり、さういふみなしかたからしては出て來ないミころのものであります。彼が此の冒頭に語つてゐる精神を、單なる思想、もしくは謂はゆる形而上學ミとしてのみ解するならば、其れは、ほんと言葉ミほりに他人のものを彼が借りてきて、其れを利用して自己の理論ミとしてゐるのである、ミ云ふミこは、なんでもなく出來て、しかも、然う解釋してまことに安々ミ彼の思想を云々したり利用したり利用することも出来るのであります。しかしそれでは、此の活ける古典的神を、全く殺しはてゝ、フレーベルの腐朽せる形骸を、生けるフレーベルそのものであるかに扱ふミこに了るだけのことあります。しかしフレーベルが不朽であり、今も生ける古典ミとして其の「人の教育」が我々に迫るのは、そしてそこから我々が問題解決の指示を與へらるのは、彼の語れるミころ、若しくは語るミころを、たゞしく解するミこによつてのみ可能になるのであります。そのためには、此の冒頭に述べられたる、たしかに思想ミとして扱へば扱ひ得るミころのものも、しかし彼においては、若しくは彼にミツテは、思想のかたちをミツテあらはれた、信念、もしくは言葉の廣く且つ正しい意味において信仰であつた

ことを、まづ認めてかゝらねばならんのあります。すなはち、彼にこつては、嚴としてそこに立つ事實、其の眞相の表現、すなはち眞理として、其の事實が言ひ表されてゐるのであることを、したがつて、學究者の概念表現といふものではなく、此の「人の教育」者を信念的に内より動かし、上より支配してゐた當の活ける信仰そのものが、表白せられてゐるのである。これが、理解せられねばならんのであります。若し此の理解なくして、いな斯かる理解なきをばなさうともせずして、フレーベルをかつぐならば、フレーベルを殺し、保育を殺し、宗教々育を殺し、また自ら古くなりはてるだけのことをあります。それはそれとして、こもあれ、此の冒頭の數行は、たゞ數行ながら、さすがに彼がやむにやまれぬ叫びとして、「學者の如くならす權威あるものゝ如く」語つてゐるところだけに、我々をうち、我々をからく、我々を動かし、そして我々を眞理の世界に導いてくれるところであります。

こんなふうにして眞理、もしくは彼の信念を思想として表白してから、彼の敍述は、それをしだいに説明してをります。

『此のいたるところに支配してゐる法則の根柢には必然に、一の、いたるところに働き自明にして生々々活ける自覺的なる、したがつて永遠に存在せる統一性がよこたはつてゐる。このことは、此の統一性そのものと同じやうにして復、信仰によるにせよ直観によるにせよ、つれにもあれ、おなじく生々々おなじく把握的包括的に識らるゝのである。したがつて此の統一性は、しづかにものごとに注意する人の心情、思慮深く明透なる人の精神によつてまた、すでにはやくより確實に認められたのであり、そしてこれからも、それについてはたえず識らるゝことであらう』。

此の統一性が神である。

一切は此の神的なものすなはち神より出でる、そして、此の神的なものすなはち神によつて其れぐぐに性状を定められてゐる。神のうちにこそ、一切のものゝ唯一の根源は存在する』。

彼の眞理、彼にこつて生げる世界觀したがつて人生觀であるところのものゝ表白としての眞理を、かく説明してから、ほこんだ冒頭の數行同じ敍述を、さきには「法則」であつたものを「神的なるもの、すなはち神」として言ひ換へながら、

「あらゆるものゝうちに神的なるものすなはち神が宿り働きそして支配してゐる」。

あらゆるものは、この神的なるものすなはち神のうちに、安らひ、生き、成立し、この神的なるものすなはち神に由つてゐる」。

一切のものはたゞ、神的なるものがそのうちに働いてゐることに由つてのみ存在する。

おのゝものゝうちに働く此の神的なるものが、そのおのゝものゝ本質である」。

述べて、自ら捉へたる眞理、それによつて自ら生かされつゝある眞理を、表白し、説明し、そしてその上に自己の思想を展開建設してゆかうとする根本基礎を、かくして、冒頭の數説において我々に提示してゐるのであります。

III

譯文を決して責めるのではないが、原文とはこゝろもちがかなり異ふ、云つた其のこゝろもちが、此の極めて拙な、原著者に對してまことに心苦しい紹介によつて、少しでも氣づいていたければと思ふのであります。

しかし、かうして記しながらも、原文を通して、不束な私の読みやうを通してさへも脈々と迫つてくる原著者の心に、實にうたれて、しかも、其の立體的な深さ、生ける深さのまへに、自分の解釋の到底のきこじきえぬこゝを感じさせられて、茫然と手をつかねさせるゝ感が實に深かつたのです。そして、これは、かういふ古典は、私達の近くでいへば小西重直先生とか倉橋惣三先生とかいふ方々でなければ、紹介なんかできるものでない、心から幾度も思はせられるのでした。

それはそれさしても、原著者の心つかひには實際むしろ驚かされます。例へば、ものゝ若しくは存在の本質としての「神」を説く場合でも、たぶんフレーベルの周囲でも然うでありやすかつたであらうやうに、「神」といへば説く人も、聽く人も、誤解する人も、やゝもすれば單なる形而上學的知識にしてしまひやすくなるのを、そしてそこから、歪められたる所謂教育、歪められたる所謂宗教々育が派生することを、あくまでも防がうされたものらしく、一つの「神」といふ言葉を出すのにも、フレーベルは實に用意に用意を重ねて、「此の統一性が神である」と説明した後にもなほ極めて用心深く、「此の神的なものすなはち神」といふやうに述べてゐます。生ける心、烈々たる心、しかし暖かく母の如き心、しかも良き母の如く敬虔なる此のフレーベルの心に、原文を通して、そのあひだより我々に今さゝやく心に、實に私達はうたれざるをえないのであります。

附記一、自然と精神とを一にするものとしての「生」もしくは「人」。此の事については、ヘーゲル風の考へ方を、詳しくは參照していただきねばなりません。フレーベルの思想史的背景をかりに離れるとしても、原文のことの所を理解するためにはヘーゲルの謂はゆる「精神」、その辯證法的な、媒介を通じての自己實現についての、深みのある哲學を、どうしても必要です。まして、フレーベルが生きてゐた世界の思想史的背景は、あの敬虔なるカントよりいで、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等、偉大なる思想家達によつて指導されてゐたことを思へば、ますく其の必要を感じさせられます。

附記二、フレーベルの思想史的背景。此の事に關しては、實に手際よく、原文の刊行者ツインメルマンによつて、解説せられてをります。そしてフレーベルの考へ方は、シェリングの哲學を極めて近い關係にあるが、しかし直接にはクラウゼの系統であることを、クラウゼの原文を引きながら説明されてゐます。今頃はしいじでせうから引きませんが、

さきに不手際に言ひかへてみたフレーベルのあれだけの所についてさへ、ツインメルマンは、シエリングやクラウゼから、數箇所の原典引用をなして、フレーベルの生ける信念を、他面から支持してゐた思想を示してくれます。

附記三、私事ながら、フレーベルの此の心にうたれて、其の人に常に接したく、その一つのよすがにもご、倉橋惣三先生祕藏の初版本から近く複製されたフレ・ヨ・エベル、母の歌「愛撫の歌」、ブリュウフェル編及跋「茅野蕭々譯」を手にいれて、まさしく座右に飾つたのでした。此の本、それが如何なる輝き「生命をもつてゐるかは既に知られてゐることあります、が、此の複製本を刊行された方々をも、フレーベルの生ける魂が動かしてかくなさしめてゐるのだ」と思ふ、其の本を座右にしながら、敬虔なる心にならせられるのであります。

さうしてやりましたところへ、友のひとりは、明治三十年三月に、ハウ女史が出された「母の遊戲及育児歌」といふ、前記の本の全く日本風の、和綴二冊、和紙に、繪も言葉も全く日本風に印刷した本をもつてきました。ハウ女史の此の苦心、まさにフレーベル的な暖かき苦心、いなハウ女史をしてかくせしめたフレーベルその人の魂、いなさらに、フレーベルを通じて今も我等のなかに働くもの、即ちフレーベルのいはゆる「神」の、生ける眞理性に、かさねてうたれたのでした。